

[音 楽]

鑑賞を核とした活動で児童がより思考・判断する姿を目指して

- [共通事項]に着目させることで、授業の活性化を図る -

佐藤 康子*

1 はじめに

聴くことは、あらゆる音楽活動においてその核となる活動である。曲を聴いて、自分のイメージを創り出してそれを伝え合ったり、楽譜を見ながら階名を確認して楽器で表現したり、といった活動をこれまで行ってきた。しかし、個々の曲の感受は様々で、聴き取ったことについて話し合いをしても、自分のイメージの根拠を言葉だけで説明することが難しく、全体の学びとしてまとめきれなかった。だから、鑑賞活動で聴き取ったことや感じ取ったことを、次の表現活動で生かそうとする思考・判断の場を設定できていなかった。聴くこと、つまり鑑賞活動は歌唱や器楽において重要な役割をもつといえるのではないだろうか。曲から聴き取ったことや感じ取ったことを明らかにしながら、次の活動に生かしていくつながりが大事である。まず、鑑賞活動において児童に何を聴き取らせるか、その共通となる土台がはっきりしないと、主観的な感受のまま題材を進めることになってしまう。そこには音楽的学びや深まりがあるとはいえない。鑑賞活動から表現活動へ、習得をより深め活用していく児童の思考・判断を支えるものとして、音楽的要素への着目が必要である。つまり、音楽を形づくる要素や仕組みを意識して聴き取らせたり、感じ取らせたりする活動を展開していくということである。坪能や伊野(2008)も「聴き取る力」と「感じ取る力」の育成が大切であることを述べている。そこで、題材を通して指導する[共通事項]に注目したい。新学習指導要領において新設された項目であり、第1章総説の中で以下のように記載されている。

音楽科改訂の要点 (3) [共通事項]の新設

[共通事項]は、音色、リズム、速度など音楽を特徴付けている要素や、反復、問いと答えなどの音楽の仕組みを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさなどを感じ取ること、「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」を音楽活動を通して理解することを示した。[共通事項]は、それのみを扱うのではなく、表現及び鑑賞の各活動の中で扱うものである。

音楽科改訂の趣旨 (i) 改善の基本方針

○ (一部抜粋) 表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を[共通事項]として示し、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する。

このように、[共通事項]は、感性と知性の両面を結びつけて力を育てていくことを示している。鑑賞指導の大いなるよりどころができたといってもよいだろう。しかし、これだけを指導したのでは児童の音楽性は豊かにならない。[共通事項]のみを取り扱うのではなく、あくまで題材を通して音楽活動と関連付けながら[共通事項]を指導していくこと、ここで示された[共通事項]を曲の中でどう感じ取らせ、どう聴き取らせるか、またそれらをどう表現に生かそうとするのが大事である。こうした活動の中ではたらく力が児童の思考力・判断力であり、新学習指導要領の中で意図されている児童の能動的な姿はまさに、「思考・判断する姿」といえるのではないだろうか。

私は、音楽活動の中における思考・判断する力が、音楽と児童との双方向的なかかわりを可能なものにすると考える。

2 研究の目的

題材をとおして[共通事項]に着目させることで、児童の思考・判断する力がどのようにはたらくか、児童の姿はどのように変容していくかを検証する。

* 十日町市立田沢小学校

3 研究の方法

(1) [共通事項]を感じ取る活動

① [共通事項]の可視化

旋律の特徴について見て違いが分かるように、レガートとスタッカートの特徴を可視化させたものを提示した。(図2①, ②) これらを見ながら曲を聴くことで、[共通事項]を聴き取りやすくなると考える。また、話し合い活動においても、この掲示物を活用することで話し合いの視点を明確にさせることができ、児童の思考・判断を広げるきっかけにもなると考える。

② 体を動かす活動

体を動かす活動を取り入れることで、旋律の特徴を体のあらゆる感覚を使って感じ取らせる。自分のイメージを表現するための語彙を見つけることが苦手な児童にとっては、音楽に合わせて体を動かす活動を取り入れることで、音楽の特徴を感覚的に掴みやすくなる。また、逆に語彙が豊富である児童にとっても、自分のイメージした言語と、実際の動きの感覚で音楽的要素を確かめることができると考えた。こうした、試す・確かめるという活動は、ある程度掴んだイメージと[共通事項]である音楽的要素を照らし合わせて検証することになる。これらの活動は、自己内比較・自己内探究につながり、児童が能動的に思考・判断できる場だと考え設定した。聴く→イメージを感じ取る→聴く→音楽の特徴を感じ取る→聴く→体で特徴を表現する→聴く→自分のイメージと音楽的要素を融合させていく→聴く・・・という連続的な流れの中で、児童と曲そのものが常に関わり合いながら、児童の思考が変化していくものと予想される。

(2) 小グループでの話し合い活動

設定した5つの体を動かす活動を体験して、それぞれのブースで意見交流を行う。2つの旋律の特徴の違いについてどう感じ取れたか、自分なりの感受を体の動きと結び付けて述べる場にする。最後に、学級全体で旋律の特徴についてまとめるための話し合いをする。「聴き取ったこと」に注目させ、意見交換する中で各自が「感じ取ったこと」を共有したり、自分なりの考えをもったりする姿を思考・判断しているととらえる。

(3) 鑑賞と表現をつなぐ活動

題材の1次で取り上げた[共通事項]を、2次からは自分の表現に意識して取り入れていく場を設定する。楽譜を見て「スタッカートの記号がついている。ピチカートポルカで聴いた特徴だぞ。リコーダーでどうやって弾む感じを表現しようかな。」児童はその特徴に気付き、奏法を考えながらよりよい表現を求めているものと考えられる。その姿を思考・判断しているととらえる。

4 実践

- (1) 指導計画 題材名 「ふしのとくちょうを感じ取ろう」(4年生)
 教材曲 鑑賞曲「あいのあいさつ/ピチカートポルカ」
 歌唱曲「もみじ」「あたらしいえがお」「オーラリー」
 器楽曲「陽気な船長」「オーラリー」

次	学習活動	共通事項 ☆音楽を特徴づけている要素 ★音楽の仕組	研究の方法との対応
1 2 時間	「もみじ」 ※時数配当指定なし。年間を通しての愛唱歌とする。 「あいのあいさつ/ピチカート ポルカ」 ・2つの曲を聴き比べたり、音の動き方を体で体感したりし、旋律の違いやそれぞれの特徴を感じ取る。 ・グループ、学級全体で話し合う。 ・旋律の特徴に注目して聴き取る。弦楽器で体験比較する。	☆旋律、音の重なり、音階や調 題材を通して共通するものは旋律の特徴であるレガートとスタッカート	(1) (2)
2 4 時間	「陽気な船長」「あたらしいえがお」 ・レガートやスタッカートの表現に気をつけながら演奏する。 ・旋律の特徴を感じ取って表情豊かな表現を工夫する。	☆音色、速度、旋律、音の重なり、拍の流れやフレーズ ★反復	(1) (3)

3 3 時間	「オーラリー」 ・サミングの奏法を覚え、リコーダーの高音域の演奏に慣れる。 ・旋律の特徴を生かし、二重奏や二部合奏をする。 ・旋律の特徴を生かして、主旋律を歌う。	☆音色, リズム, 速度, 旋律, 音の重なり, 拍の流れやフレーズ	(3)
--------------	--	---------------------------------------	-----

(2) 指導の実際

① 研究の方法(1)に関わって

1時間目に挙げた児童の言葉を集約したものが〈図1〉である。児童のイメージは、聴き取ったことと感じ取ったことの大きく2つの要素が混在している状態である。また、1つの曲に対する感じ方が対極的であるところがあり、全体として意見を集約していこうとすると矛盾が生じる。そこを「どちらだろう?」とゆさぶることで、児童の思考・判断を促した。視点を明らかにさせるために図形楽譜〈図2①, ②〉を全体に示し、旋律の特徴を可視化させた。

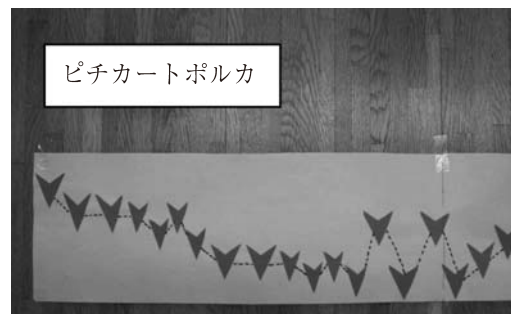
〈図1〉

〈1回目に聴いた直後の児童のイメージ〉		
あいのあいさつ ・ゆるやか ・ゆったり ・なめらか ・きれい ・クリーミー ・やさしい	ピチカートポルカ ・テンポがいい ・はねるかんじ ・リズムカル ・にぎやか ・しずか ・キレがある	

〈図2①〉



〈図2②〉



ここから[共通事項]である旋律の特徴「なめらか」「はねるかんじ」を十分感じ取らせていくために、5つの体を動かす活動のブースを設けて児童に体験させた。曲は、最初の提示部分を中心に持ち上げ比較させた。1つの曲の中でも、曲調が変わり、混乱する児童が出るのが予想されるため、主題が変わる前に意図的に区切った。1分30秒程度聴いた後、3分間グループで話し合いをし、1分の移動時間で次のブースへ行って準備する、というサイクルで4回行った。全ての活動を必ず体験するものではなく、気に入ったものは繰り返し行ってよい、という指示を出した。自己選択するには、そこには思考・判断が必要となってくるからである。ただし、1つの手段ばかりでは、思考は深まらない。自分の中でいくつか選択することで、比較検討しながら「この方法だと、特徴が分かりやすいな。」という自分の結論を導き出すことができるものと思う。そこで、2種類以上は体験しようと投げかけた。

	体を動かす活動の種類	体を動かす活動の意図
A	指揮者になりきる！ (選択した児童 81%)	児童はいつも全校集会で校歌を歌う時、指揮者の指揮に合わせて歌っている。音を小さくするときには、指揮の振り方が小さくなり、逆に、大きくするときには、指揮の振り方も大きくなる。この経験から、指揮者になりきるということは、曲をより意識して聴きながら、自分の感じ取ったことを、指揮棒を振ることで表現するものと考えた。

B	ボールを転がしたり、ついたりする。 (選択した児童100%)	音符の動き方が大きく2種類あり、なめらかに移動するものと、飛び跳ねて移動するものがある。この両者を分かりやすく対比できる動きとして、ボールを転がす、ボールをつくという動きがいいのではないかと考えた。他にも縄とか点と線の筆記など様々な活動が考えられたが、休み時間にボール運動で活発に動く児童の実態から楽しみながら参加できるのではないかと考えボールに設定した。
C	絵で表した楽譜をなぞったり、指でおさえたりする。(図形楽譜) (選択した児童 76%)	なめらかな動きは曲線で、弾む感じは点で、視覚的にもその特徴がつかめるよう、音符による楽譜にはしなかった。曲を聴きながら、指でその音の動きをなぞったり、ぴょんぴょんおさえたりできるように、提示部分の旋律の図形楽譜を作成した。
D	体をゆらしたり、とびはねたりする。 (選択した児童 71%)	曲を聴いて感じたままに、自分の体を動かす。普段の授業の中で、体を動かす活動が好きな児童が多いので抵抗感はありませんことから設定した。
E	(これは、最後に全員で) ヴァイオリン体験! 弓で弾いたり、指ではじいたりして音を出してみよう。	レガートを弓で、スタッカートでピチカートで体感する。演奏というレベルまでいなくても、音を出すだけで、その特徴は感じ取れると考えた。また、演奏されている本物の楽器にふれることで興味関心が高まることも期待した。

② 研究の方法(2)に関わって

活動に慣れるまで、最初の話し合いはあまり活発に意見が出なかったが、2回目、3回目・・・進むうちに友だちの意見に対して自分の考えを述べる姿勢ができてきた。

〈図形楽譜〉での話し合い 人数：2人

児童A：「あいのあいさつ」は、なぞっていると流れるように進んだ。なんだか、なめらかな感じだった。

児童B：そうだね。私はゆったりと、ゆるやかな感じがしたよ。

でも「ピチカートポルカ」はそうじゃなくて、結構、逆って感じだった。

児童A：そうそう、トントン（指で押さえるのが）忙しかった。追いつくのが大変だった。

児童B：トントン、トントン（空中でやってみる）・・・上から下にとぶところとか、楽しかったね。ぴょん、ひゅって、とんだよね。とびはねる感じだね。

〈体で表現〉での話し合い 人数：4人

児童C：「ピチカートポルカ」のはじまりが、いきなりボンって聴こえてびっくりした。あわてて飛び跳ねた。

児童D：私も。その次のボンっていう音もびっくりしなかった？そこだけ音大きいよね。

児童E：そのあとの所が細かくて、たくさんちょちょことはねるのが大変だった。でも、ジャンプする動きは曲に合っていたと思う。

児童C、D、F：同じ意見。 児童D：「あいのあいさつ」は揺れる動きが曲に合っていると思った。

児童F：私もそれに似ているよ。私は、なめらかな曲だなあと考えた。だからゆらゆらしながら曲を聴いたよ。

児童B、児童Fの波線部分から、体を動かす活動を通して思考が深まったことがうかがえる。何度か耳で聴いたことによるイメージを、体を動かす活動と合わせることで検証し、自分なりにその特徴を判断したといえる。それが、児童Fの傍線部分から波線部分へのつながりで見えてくる。児童Bも、児童Fも、友だちとの話し合いから意見を引き出された形で、自分の意見を述べている。似ている考え、違う考えにふれながら、自分のイメージをどんな言葉と結び付けるのか、その考えは話し合いの中である程度変わってくるものであるからだ。まして、こうした決まった答えの無い探究型活動においてはなおさらであろう。相手とコミュニケーションを図りながらその考えにふれ、自分の考えとすり合

わせて考えることで、自分のイメージするものをはっきりさせていくことができたのではないだろうか。曲に合わせた動きを体験することで、児童が旋律の特徴について比較する姿が見られた。聴き取った音、視覚に訴えるもの（楽譜や道具）をもとに、その音楽的な要素は何か、自分なりに考え結論を見い出そうとして思いを表出（表現）していた。

学級全体での確認

T：「ピチカートポルカ」で、ぴったりのイメージはあったかな？

児童G：ダンスしているみたいな曲だったよ。ダンスっていっても、激しい方ね。とんだりはねたりするやつ。

児童H：テンポがいい感じ。 T：テンポがいいって、つまりどういうこと？

児童I：う〜ん……。 児童J：それって、テンポが速いってことじゃない？

児童I：ああ、そうだ。そんな感じ。

T：曲の速さが速いということになりそうだね。あとはどうかな。

児童K：はねる感じ。 児童L：俺もそう思った。ぴょんぴょんって感じだったよね。

T：みんな、一人一人が自分のイメージを持てたことは、すごいですね。

ここで大きく2つに分けられる意見が出ましたね。「はやい」と「ダンスしているみたい」「はねる感じ」です。整理してみますよ。今日、みんなは「ふしのちがいを体で感じ取る」活動をしましたね。ふしというものは旋律のことでした。旋律の特徴、というふうに考えるとどちらでしょうか。

児童K：「はやい」って、速さだから違うかな……。 児童L：「はねる感じ」がぴったりだと思うけど。

T：そうだね。Kさんが言ってくれたように「はやい」というのは、「速度」を表す言葉ですね。「速度」も音楽の特徴を表す大事な要素の一つですね。ここでの全体の意見としては、「ピチカートポルカ」の旋律の特徴は「はねる感じ」にまとめることができるようですね。

同様に「あいのあいさつ」についても旋律の特徴を「なめらか」にまとめた。

終末で「なめらかな特徴のことはレガート」「はねるかんじの特徴はスタッカート」という音楽用語と結び付けておさえた。音楽用語についてだが、スタッカートは4年生で新しく指導する内容となっているが、レガートについては本来中学校の指導要領での扱いである。しかし、スタッカートに対応する言葉として無理はなく、抵抗なく理解できるものととらえ、発展的内容として取り扱った。

③ 研究の方法(3)に関わって

「陽気な船長」は、ABA形式の曲で、Aの部分にスタッカートがついているので、聴いた特徴と、楽譜を見た記号の特徴がマッチしやすいことから、たくさんの児童が「この記号ははねる記号だ。」と声に出していた。前時でつかんだ旋律の特徴をそれぞれAは「はねる感じ」Iは「なめらかな感じ」だと児童はすぐに対応させた。では、どう演奏するといいか。すぐに技能を教えず、自分のイメージと吹き方を思考錯誤させる時間を取った。ここで音楽的要素をどう生かそうとするか、思考・判断するポイントとなる。

〈イメージに着目〉

T：陽気な船長さんは、いろいろと気分が変わるよ。はじめは、スタッカートだね。ここではどんな船長さんになっているかな。

児童M：冗談を言って、みんなを笑わせているんじゃない？ 児童N：舟の上をとびはねているかも。

T：そういった船長さんを思い浮かべてAをふいてみよう。

〈音に着目〉

T（タンギングを短くしている児童に声をかけ、みんなの前で演奏させる。）

T：Oさんはどんなところを工夫していたか分かった人、いますか？

児童M：なんか、音が短かったよ。 児童P：跳ねる感じだから、トゥーって長くやらないんだと思う。

T：Oさん、どう？正解が出た？ 児童O：だいたい当たっていると思う。短くトゥ、って吹いたんだよ。

T（短くしない場合でのタンギングだとどうなるか、教師が実際に吹いてみた。）

話が終わらないうちに、みんな、短いタンギングを試していた。Iについても、同様のことを繰り返した。

5 研究の成果と課題

(1) 〔共通事項〕を感じ取る活動

① 〔共通事項〕の可視化

図2①を使い、曲線に沿って流れるように指でなぞりながら「なめらかな感じがするよ。」と自分の感じ取った旋律の特徴を全体に広げることができた。指でなぞりながら「優しい感じがするよ。」と言っても、曲線的な指の描きと主観的なイメージである「優しい」という言葉は合致しない。この感覚の違いは、言葉だけで伝えられるものではない。旋律の特徴を可視化させ話し合いの土台にすることで、曲全体のイメージというものと、旋律の特徴というものとは、視点が違うことに気付く児童が多く見られた。旋律の特徴を捉えることができた児童は、1時間目終了時で30%程度だったのが、1次の終了時ではおよそ80%に上がった。

② 体を動かす活動

児童全員が選択したボールを使っての動きでは、始めはいろいろな動きが見られた。1つの動きに対して「合わない」と感じたものは、すぐに違う動きを試す、その連続だった。最後はほぼ全員が、スタカートではボールをついて、レガートでは2人組でボールを転がし合う動きに落ち着いた。こうした姿から児童の思考する姿が見て取れた。本研究ではA～Eの5つの手立てを講じたが、他の手立てではどうであるのか。今後もより有効な手立てをいろいろ試していきたい。

(2) 話し合い活動

聴き取ったこと、感じ取ったことが混在した状態からイメージと旋律の特徴に整理することができた。①でも挙げたように〔共通事項〕を可視化させた図形楽譜が大きな役割を果たしていたといえる。

(3) 鑑賞と表現をつなぐ活動

聴き取った旋律の特徴を表現に生かそうとする時、友だちの音と自分の音を聴き比べたり、自分の出したい音と実際の音を聴き比べたりする過程で「Aさんみたいはずむ、短い音にするには、どう吹けばいいのかな」「息をこう吹くと、どんな音になるかな」と考えながら何度も試す姿がみられた。よりよい表現を求めた、児童が思考・判断している姿といえるであろう。

6 おわりに

今までは、感じ取ったイメージと〔共通事項〕である音楽的要素について混在した状態のまま、強引にみんなで共有し、その違いを意識させることなく学習を進めることが多かった。しかし、〔共通事項〕に着目させることで、その曲を特徴付けている要素は何かという視点を明確にすることができた。視点を明確にするということは、イメージと音楽的要素を区別する判断基準ができるということである。曲への主観的な思いも大事なものであるが、より曲を理解し、その楽曲の持つ特有な面白さを感じることは大切なことである。その曲を特徴付けている要素について探ることは、音楽性を豊かにすることにもつながる。その手立てとしていくつか試みたが、一番有効であったのは〔共通事項〕の可視化であった。話し合いの土台として図形楽譜が重要な役割を果たしていた。今回の題材では、旋律の特徴が〔共通事項〕であったが、なめらかな曲線的な図形と直線的なはずむ図形を指でなぞる動きや指揮棒をふる動きが、特徴をつかみやすかったようである。この学習後も、なめらかな曲と出合った時に人差し指を出して曲線を空に描いたり、掲示した図形楽譜を「あいのあいさつ」を口ずさみながらなぞったり、といった姿がみられた。こうした姿から、〔共通事項〕に着目させることで、児童が音楽に対して主体的に働きかけるようになったといえるであろう。そして、鑑賞だけでなく題材を通して〔共通事項〕を意識させることで、児童はより思考を深め、音楽の楽しさを体感できるものと考えられる。

〈参考文献〉

- 高須 一 「特集 教育課程改善の方向 音楽科の課題と改善の方向」初等教育資料 (2008) pp.34-37
 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 音楽編』(2008)
 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 音楽編』(2008)
 坪能由紀子・伊野義博 「小学校学習指導要領の解説と展開 音楽編」教育出版 (2008) pp.22-88
 石井ゆきこ 「特集Ⅱ 学習指導の創造と展開～鑑賞を中心とした題材計画の作成－[共通事項]を生かして－」
 初等教育資料 (2010) pp.58-63